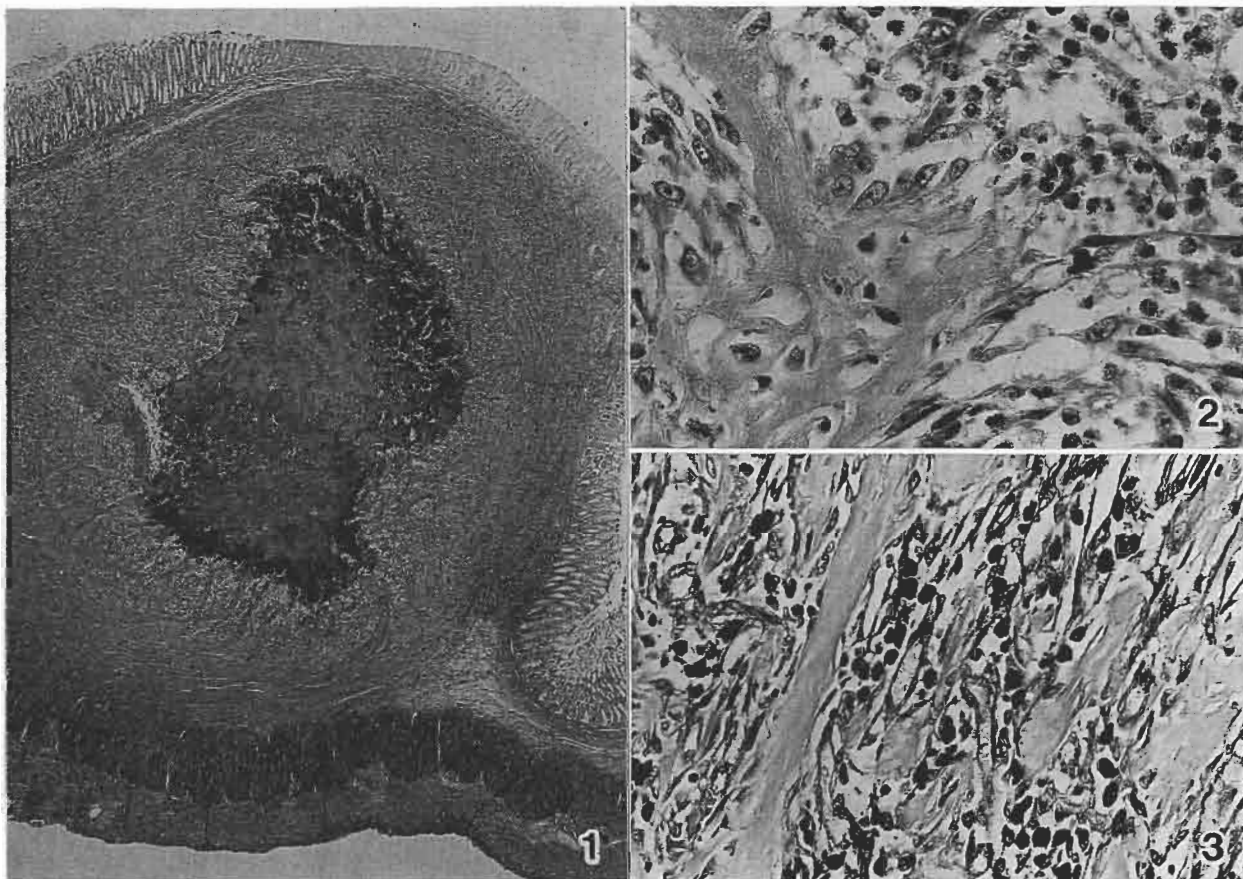


# 猫の結腸

北海道大学獣医学部比較病理学講座出題 第34回獣医病理学研修会提出標本No.618



**動物：**猫，アメリカンショートヘア一種，雄，2歳10カ月。

**臨床事項：**食欲低下，消瘦，嘔吐，黒色泥状便排泄を示したとの稟告で某動物病院に来院。臨床検査にて結腸壁の著しい肥厚及び腸管腔の狭窄を認め，罹患部位を切除。翌日衰弱著しく死亡。糞便検査では寄生虫陰性。本例は，生後70日齢時に好酸球増多症（白血球百分比で13%）がみられたことがある。

**肉眼所見：**長さ約5 cmに及ぶ腸壁の肥厚部の粘膜上皮下に，最大小指頭大に至る，淡褐色または帯緑褐色の結節6個が管腔側に隆起していた。結腸壁は最大1 cmに肥厚。各結節の中央部は灰白色壊死性で，潰瘍を伴うものも見られた。

**組織所見：**病変は，粘膜下織に主座し，膠原線維に富む肉芽組織の増殖，炎症細胞の浸潤，結節中央部に認められる膠原線維と浸潤細胞の変性・壊死性変化からなっていた（写真1，HE，×11）。壊死巣辺縁では，線維素様，顆粒状または硝子様に変性した膠原線維とともに著しい好酸球浸潤とマクロファージの浸潤，増殖が認められた（写真2，HE，

×380）。一方，壊死巣周囲の膠原線維に富む肉芽組織内では，好酸球，マクロファージの浸潤は一般に乏しく，かわって高度の肥満細胞浸潤がみられた（写真3，トルイジンブルー，×260）。潰瘍は広範な壊死巣に関連して形成されていた。病巣内には，組織化学的にも病原体や異物は検出できなかった。また，結腸リンパ節においても，梁柱，被膜に好酸球と肥満細胞の中等度の浸潤が所見された。

**考察及び診断：**本病変は，好酸球と肥満細胞の浸潤を伴う肉芽組織の結節性増殖が基本となり，これに膠原線維の変性変化及びマクロファージの反応が生じ，二次的に潰瘍の形成が加わったものと解され，アレルギー性疾患が疑われた。腸壁への好酸球の浸潤を特徴とする疾患として，犬，猫，馬，ヒトで好酸球性腸炎が知られている。この腸炎は好酸球の浸潤形態から，び漫型と限局型（好酸球性肉芽腫）に分類される。しかし，限局型では通常膠原線維の変性を伴わないことから，提出標本は，「猫の結腸にみられた膠原線維の変性を伴う好酸球性肉芽腫」と診断した。